
俺達のRPG物語（＋）

聖魔光闇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺達のRPG物語（＋）

【Nコード】

N7461W

【作者名】

聖魔光闇

【あらすじ】

人々を襲う動植物。それは全ての始まりだった。狩りと称し、戦闘を繰り返す少年達。別れと出会い、殺戮を繰り返し彼等は強くなっていく。その行く末に待つモノとは。

序幕（前書き）

以前に「俺達のRPG物語（改）」として投稿していました台本形式の文章を、小説風に書き直してみました。

まだまだ至らない点は、数多くあるとは思いますが、よろしくお願いいたします。

基本5日に一話の更新をしていきたいと思っています。

序幕

ビールの空き缶が、数え切れない程散乱した薄暗い部屋の中で、男はソファーに座り、ビールを飲みながらテレビを見ていた。いや、見ていたというよりも、ついていただけなのかもしれない。テレビの中では、ニュースキャスターとコメンテーターが、深刻な表情で話をしていた。

「それでは続きましての話題です」

「昨年から、動植物を中心に広がりをみせている、新型のインフルエンザですが、昨日大阪にて人の感染が確認されました」

「このインフルエンザですが、発症するとどうなるのでしょうか？」

「そうですね、従来のインフルエンザであれば、感染・発症後風邪のような症状が現れ、その後39 近い高熱を出すのがインフルエンザの特徴ですが、今回の新型は、風邪症状が全く見受けられず、高熱を出すという事もかなり稀なようです。症状としては、今まで動植物の感染例しかなかったので、はつきりした事は申し上げられませんが、発症後突如意識不明の状態になり24時間〜48時間後に意識を回復します。ただ、この意識回復時に性格に変化が生じ、一律に攻撃的になり、植物の場合であれば、自我の生成と共に、移動手段が確保されます。これに伴い、植物が人間又は他の動物を襲うという例が確認されています」

「それでは、このインフルエンザにかかった後の対応ですが……」

……

「そんなの分かってるよ。バカじゃねーのこの番組」

それまで、テレビの音とは無関係のようにビールを次々と飲み干していた男だったが、突然立ち上がると無造作にテレビを消し、ソファーに座り直すと、遠くを見るような目をした。

『そう、今となっては当たり前の事だ。近所の犬や猫が突然狂暴になって人間を襲ったり、その辺の雑草や木が、根っこで歩いてたり

……。近所のガキ共は、面白がってバットやエアガンなんかを持ち出して、モンスター狩りだとか言って、学校も行かず毎日毎日、集団で行動しては、人間以外の生き物を何の感情も無く殺しまくっている。隣の家じゃ、家族同然に飼っていたワニがインフルエンザにかかったらしく、泣く泣く包丁で滅多刺しにしてたっけ……。でも、

……。ん？ えつ、人間の感染者！？」

男の顔に驚きの表情が現れたと思うと、男は慌ててもう一度テレビをつけなおし、今度は真剣に画面を覗き込んだ。

バトル！！

ジリリリリン！ ジリリリリン！

激しく鳴り止まない電話に少年は、手を伸ばし受話器を上げる。
先程まで寝ていたと思われる少年は、重い瞼を擦りながら、受話器を耳に当てた。

「おーい！ 正志！ 今日も行こーぜ、モンスター狩り！」
受話器の向こうから、元気な少年の声が飛び込んできた。

「うん？ 頼？ なんだよ、こんな朝早くから……」

正志と呼ばれた少年は、まだ眠たい目をこすりながら面倒臭さそうに答えた。

「朝でもいつでもいいじゃんよ！ 正志！ 狩りに行くぜ！」

「ああ？ 今日も行くのかよ！ しつこいねえ、お前も……」

「あつたり前じゃん！ 今日こそは負けねーからな！」

彼の名前は、^{かんざき}神崎 ^{まさし}正志。で、このハンティングに誘ってきてるのが、親友の^{くりはら}栗原 ^{らい}頼。

彼らは、ほぼ毎日このハンティングで、どちらが多くの獲物を倒すことが出来たか、競争をしている。今のところ正志が19勝5敗で勝っているのだが、頼にはそれが気に喰わないらしい。

「当たり前じゃねーか。散々、お前に負けてばっかの俺じゃねーぞ。今日からは、もう負けねー。なぜなら……、こいつ、こいつがあれば、もう絶対に負ける訳がねーからだ」

「おっ、またまた何か秘策か？ 毎回飽きないねえ、お前も。今回の秘策は何だ？」

「おっ！ 興味あり？ じゃあ、教えてやるよ。今回は、これ。って言っても電話じゃ見えねーか。刀だよ刀。家の蔵の中を、何かいい武器はねーものかと探し回ったら、出てきたよ。やっぱこういう時は蔵だねえ。ゲームとかなら、武器屋なんだろうけど、そんなねーしな」

頼の家は昔からの旧家で、かなり以前から建っているらしい。当然、見た目だけでなく、それなりに金銭的に裕福で家の隅には、大きな蔵が建っていた。

「刀！ うそっ！ また物騒な物見つけてきたねえ。これは、俺の最強伝説も終わりかねえ。なーんてな、そんな訳ねーじゃん。俺のこの最強装備が負ける訳ねーての」

「へっ、言ってくれんじゃねーか。よし、今から勝負だ！ すぐ行くから逃げんじゃねーぞ！」

頼はそう言った途端、電話をきってしまった。

「あつ！ おい！ 今からって。…… ってもう切れてるし。しゃーねーなあ、じゃあ俺も装備の準備するか」

そう言つと正志は、言葉とは裏腹に楽しそうな表情で受話器を置くと、服を着替え始めた。

数分前まで眠たそうにしていた正志の姿は、もう何処にも無かつた。

急病人

「おい！ 浩二！ しつかりしろ！ おい！ 浩二！ 浩二つてよ！」

「そのあなた、邪魔！ どいてくれる！」

浩二と呼ばれたぐったりとした男を乗せたストレッチャーを小走りで押しながら看護師が大声で周りの人に怒鳴り散らしている。その傍で、ストレッチャーの男にすがり付くように、一人乗り男が大声で、ストレッチャーの男に声を掛け続けていた。

「あの。ちよつとすみません。あなた、あの方を連れてきた方ですよ。」

少し今の状況にしては、おっとり過ぎる口調の看護師が救急搬送室の中より現れると、ストレッチャーの男を浩二と呼ぶ男に話し掛けた。

「あ、はい。そうですね、なんですか？ あいつ。浩二、大丈夫なんですよ！？」

「それは、今から検査を行いますので、結果が分かり次第お伝えします……。それでですね、あの方があのような状態になった時の事を詳しくお聞かせ頂きたいのですが、よろしいでしょうか？」

慌てているのか、切羽詰まったような表情だった男は、看護師のおっとりした口調に苛立ちすら覚えていた。

「あ？ ああ。あの時の事ね。でも、そんなの何で必要なんですか？ 浩二は、浩二は大丈夫なんですよ！？」

「浩二さんの事は、これから検査をいたしますので、その検査結果が出るまで何とも申し上げられませんが、あの方……浩二さんがあの状態……意識不明の状態になった時の事を詳しく聞かなければ、詳しい検査が出来ませんので、お聞きしています。例えば、浩二さんが何かの拍子に頭を強く打った等で意識を消失したのであれば、頭部内に出血が見受けられる可能性もありますし、突然意識を失わ

れたというのであれば、他にいろいろと検査しなければならなくなります」

何か思う節でもあるのか、看護師の言葉は、話が進むにつれ始めの覇気がなくなり、小声になっていった。

しかし切羽詰まった男は、看護師の言葉をまともに聞く事が出来ないのか、態度の変わった看護師に気付く事が出来ずにいた。

「分かりました。あの時の事です。ね。お話致します」

そう言っただけ、突然遠くを見るような目になり、ゆっくりと話を始めた。

「あの時、俺達は仕事の帰りに飲みに行ってたんだ。ちょっとした居酒屋で席に着いて、始めは上司の愚痴や嫌いな奴の陰口・気になる女子社員の話なんかで盛り上がっていたんだけど……。突然、何の話をしていた時だったかなあ？　話が止まって、お互い黙り込んでもって……。そしたら、もう何を話掛けても浩二の奴ボーンとしたまま、返事さえへんようになって……。ちよつとイラッとしたから「おい！　浩二！」って肩を軽く叩いたら、そのまま浩二がバターンって床に倒れよって。何が起こったんだか分からなくて、ちよつと呆然としてもうたんだけど、すぐにこれはヤバイって思ったから救急車呼んだんだ」

遠くを見詰めたままの男を尻目に、看護師はそこまで聞くと、軽くお辞儀をした。

「そうでしたか。分かりました。ありがとうございます。それでは今戴いた情報もふまえて、検査を行いますので、今日はおひきとり頂いてけっこうですよ」

そう言っただけ去ろうとした看護師の肩を掴むと、男は看護師に怒鳴り付けていた。

「浩二は！　浩二はどうなったんですか！？」

「何度も申し上げております通り、ただいま検査中です。検査結果が出なければ、何とも申し上げられません」

看護師は変わらず、おっとりした口調で答える。

「そもそも、なんで検査が必要何ですか？　ただ、意識がちよつと飛んだだけかもしれないじゃないですか？　なあ？　何か隠してないか？　俺、あいつの家族じゃないけど、マジで心配なんだよ」

男が真剣な眼差しで看護師を見つめて話をする、看護師は少し困ったような表情をみせたが、再びおっとりした口調に戻ると男の腕をとった。

「ここではなんですので……」

そしてそのまま、男を個室へと誘導し、重たい口調で話を始めた。それは男にとって、考えていた事とは全く別の事だったようで、話が終わる頃には、男の顔は蒼白になり、とぼとぼと病院を去って行った。

男は、看護師の最後の言葉が頭から離れなかった。

「この事は、浩二さんの御家族様であつても絶対に話してはいけませんよ。私はあなたの……」

『話してはいけない事……。じゃあ、どうやって浩二の両親に伝えればいいんや！？』

男は病院から出ると、大きな溜息と共に軽いめまいさえ覚えるのだった。

伝説の武器

「へへっ！ どうした頼！ もう終わりか？ 余裕だね！」

辺りにモンスターと化した動植物が横たわる中、正志は少し息を切らせながらも、ギラギラした目で笑みを浮かべながら、頼に話し掛けた。

「くそ！ まだだ！ なぜだよ！ なぜお前に勝てないんだよ！」

頼は息を切らしながら、ひざまづくと地面を拳で殴り付けた。そんな頼を横目に正志は、自分の装備を取り出しながら、自慢気に話始めた。

「へっ！ それは、俺の装備が完璧だからさ！ まずこれ、粉碎兵器・メガトンハンマー！」

「かつこよく言い過ぎじゃねーか？ ただの釘バットじゃねーか？」

正志が背中から抜き出した無数の釘の刺さった木製バットを見ながら、頼は大声を出した。

「そして、我が家に伝わる伝説の秘剣・エクスカリバー！」

「それは、俺と一緒にアウトドア用に買いに行ったサバイバルナイフだろ！」

正志が腰から引き抜いたナイフを、呆れた顔で眺めると、頼は首を横に振った。

「きわめつけは、泣く子も黙るオイルタンクと火炎放射機！」

「おいおい、よく恥ずかしげも無くそんな事を言えるよな！ それ、油の入った水鉄砲とライターと殺虫剤をひつつけただけの物だろ！

確かに火炎放射機ってかつこよく言ったりもするけどさ」

もう言う言葉が見付からないとばかりにそれだけ叫ぶと、頼は仏頂面のまま座り込んだ。

「へへっ。要は考え方さ。まずは形からってね。こういう風に考えた方が、カッコイイだろ？ しかも、これがマジで強えーしょ！ お前への連勝が物語ってんじゃないか！」

「マジやってられねーよ。なぜ、そんな身近に在るような武装の前に負けねーといけないんだよ」

正志の装備を眺めながら、まだ納得がいかないとばかりに、自分の刀を見詰めなおした。

「これで、レベルアップでもしたらなあ」

正志がそう言って、遠くを眺めると、頼も大きく頷いた。

「そうそう、ゲームとかなら、レベルアップして攻撃力が上がった、ヒットポイントが上がったりして目に見えて強くなるんだけどなあ」

「でも、実はレベルアップしてたりして」

「どうして？」

頼に尋ねられて正志は、サバイバルナイフを眺めながら話を続けた。

「今までさ、ずっとこいつらで、モンスターどもを狩ってきたじゃん。だからさ、実は力が上がったり、走り回ってるうちに持久力が上がったりにしてさ、それがレベルアップって事だったりって思ってたさ」

「強えー奴はいいねえ、楽天的で。俺は、こう何か音が鳴ってレベルが1アップしたとか言われた方が、強くなってるって気がしているわ」

「お前それ、ゲームのし過ぎだぞ！ まあ、確かにそっちの方が、実感は沸くけどね。……って話し込んでる場合じゃなさそうだぞ！」

半ば呆れた顔で話を聞いていた正志だったが、周囲に近付く無数の影を見付けると、険しい表情になり立ち上がった。

「何か、のんびり話過ぎたな」

頼もゆっくりと立ち上がると、スウッと静かに刀を鞘から抜き出し、既に戦闘体制に入っていた。

「囲まれてる！ しかも、相当な数だ！」

「でも、伝説の勇者・正志と一緒にならば何とかかなりそんな気がするのは、かなり心強いねえ」

「サンキュー！　そう言われちゃ、ご期待に沿わないといけなーな！」

「まあ、こいつら大半がプラントモンスターみたいだから、動きは遅いし何とかなるさ！」

「じゃあ、行くぞ！」

「おう！」

そう言って二人は、お互いの顔を見て、何か目で合図をしたかのように、モンスターと化した動植物の中に、それぞれ大声をあげながら飛び込んで行った。

発狂する男

四角く真つ白で、一面の壁だけ鏡張りの部屋の中にその男はいた。
「うおおおおー！ 離せえー！ おのれら離しやがれ！ ぶつ殺すぞ！ 離しやがれ！ ぶつ殺す！ 絶対、ぶつ殺す！ おのれら、これを外しやがれ！ うおおー！！」

ベッドの上で頭・首・両手足・胴に輪っかのような拘束帯を取り付けられた男が、鬼にでもなったかのような形相で、暴れながら大声で喚き散らしていた。

「これは、またえらく危険な存在になったものですね。本当に、昨日までただのサラリーマンだった男ですか？」

男の存在する部屋から見れば、鏡の部分。その隣に位置するマジックミラーの裏側の部屋にて、医師か科学者といった風貌の男が、いやらしい笑みを浮かべていた。

「はい、名前は、坂下 さかした 浩二 こうじ、現在32歳。未婚で、両親と3人暮らし。これまでは、会社内でもそんなに際立って目立つ存在ではなく、むしろ控えめな方であつたようです」

その隣で看護師のような服装をした女は、ゆっくりとした口調でカルテの内容を読み上げた。

「それが一晩でこれですか？ マスコミ対策はしているのでしょうか？」

「そつ、それが、すみません。マスコミの方も耳に入れるのが早いようで、既に知られてしまいました」

畏縮する女を余所に、特に興味もないというように、男はガラスの向こうで大声を出している浩二の方から視線を動かす事なく、男は女に声を掛けた。

「まあ、知られてしまったのでは仕方ありませんね。どこまで情報漏れたのか分かりますか？」

「確かではありませんが、多分この病気にかったとしか知らない

「は、ず、で、す」

浩二から一瞬たりとも、視線を外さず、不敵にうつすら笑みを浮かべると、男は落着いた口調で話を続けた。

「そうですか。分かりました。では、これ以上の情報の漏洩には十分注意してくださいよ」

「はい、分かりました。……ところで、この方これからどうなるのでしょうか？」

「そうですね。まあ、確かな事は分かりませんが、人間感染の第一号になるので、ウイルスの検査・ワクチンの開発に協力して頂く事になるでしょうね」

医師は、何かいやらしい笑みを浮かべながら呟いた。

「テムエら、そこで何しゃべってやがる！　ここから出せ！　こいつを外しやがれ！　はなせ！　うおおお！　！！！！　テムエら絶対、ぶつ殺す！　うおおお！」

病院に運び込まれた男。浩二は見える筈も、聞こえる筈もない部屋へと向かつて、大声で喚き散らしながら、四肢をばたつかせていた。

その声も届かぬガラス越しで男は、異様な笑みを浮かべ、女は、浩二の様子・医師の表情を互いに見ながら、不安の心を隠す事が出来ずにいた。

バトル！！2

鋭い牙からおびただしい涎れを垂らした獣型モンスターと、多くの枝を鞭のように振り回す植物モンスターに取り囲まれた状態で、正志と頼は背中を合わせたまま、バトルポジションを崩す事なく、軽く肩で息をしている二人は、互いの安否を確認していた。

「はっ！ 頼、息上がってんじゃないのか？」

「言ってくれんじゃない！ そういうお前の方が、ヤベエんじゃないのか？」

「確かに、マジで多いな。こいつは流石にきついわ」

「よっしゃ！ そしたらここからは、俺の出番だな！ 後のモンスターも数知れてるみてーだしよ！」

獣型モンスターの牙の攻撃を刀で受け流しつつ、頼は口の中に入った刀を、モンスターの後方へと流れるように斬りつけた。モンスターは背中部分と腹部分に分断され、そのまま頼の後方に落下した。「ふんっ！ 俺もまだやれるぞ。お前に負けてられっかよ！」

モンスターの攻撃を素早いステップでかわし、正志は釘バットで植物モンスターの幹を粉碎し、サバイバルナイフを縦横無尽に斬りつけた。

「俺達も目茶苦茶だよな！ 話しながらバトルなんてよ！」

「はは、マジ言ってる。でも、やっぱ俺ら強くなったって事じゃね！？」

「だったらいいな！ っとラスト1匹頂き！ ……はあ、はあ、どうだ、思い知ったかバケモノ共め！ 俺達は、この辺りじゃ負け知らずなんだよ！」

頼は、飛び掛かる獣型モンスターの腹に刀の先端をあてがい、そのまま走り込むと、その腹を切り開き、落下するモンスターを振り返りながら大声で言い放った。

「あゝあ、最後持ってかれた。ショックでけー！」

正志は空を見上げ、いかにも屈辱といったように、両手をあげた。そしてそのまま二人は、草むらに倒れ込んだ。

「はあ、はあ、なあ、正志、そろそろ、この、装備じゃ、ちょっとヤバくねー？」

「はあ、はあ、そうか？ 俺、は、まだ、いけるぜ。なんてたって、伝説、装備、だぞ！」

激しく息を切らした二人は、モンスターの体液の散らばる草むらに横になったまま、話をしていた。

「ははっ。言ってる。俺は、マジで、ちょっと、装備、考え、直すわ」

「せっかく、刀、見つけた、ばかり、なのに、か？」

「これは、……ふう！ これは、これからも使うさ。でも、俺も複数装備を考えようと、思ってたさ」

「なるほどね。やっと俺の偉大さが、分かったと」

「へっ！ マジで言ってるやがれ！」

二人は、呼吸が落ち着いてからゆっくり立ち上がると、モンスターの体液にまみれたお互いの顔を見て笑いあった。

面会者

ここは、とある病院の入院用受付。そこに、不安気な表情を浮かべた老夫婦が、受付の担当と何か言い争っていた。

「ここに、浩二が運ばれたと聞いたからきたんや。お前じゃ話しにならん。別の奴を呼べ！」

「だから、何度も申し上げております通り、ここに坂下浩二さんという方は、入院されておりません」

入院患者の台帳とみられる分厚いファイルのページを忙しくめくりながら、受付の女性は、苛立ちを隠せないように説明している。

「じゃあ、連絡をして下さった木村さんが、嘘をついているとでもあなたは言うのね？」

老紳士の傍らに立っていた老婦人が、受付台に手を置き、受付の女性に話し掛ける。

「そう申されましたも、入院台帳にも、入院病棟にも坂下浩二さんという方はおられませんし、大体その木村さんが来られたという、記録ありませんので……」

手元に置いた入院台帳のページを前後にひたすらめくりながら、女性は申し訳なさそうに、そして面倒臭さそうに話した。

「だから、さつきから言ってるだろ？ お前じゃ話しにならん。別の奴を呼べ。呼ぶ気が無いなら、もういい！ 警察に調べてもらう。ここで、息子が監禁されているとな！！……で、どうするんや！」

老紳士は、とてつもない剣幕で受付の女性を大声で怒鳴りつける。「どうすると言われても……」

もううんざりだと、言わんばかりの女性であったが、警察と聞き泣きそうになっていた。直後、女性の横にスツット白衣を着た中年の男性が現れた。

「どうされました？ 何かありましたか？ あまり、大きな声で話されると他の患者様にもご迷惑になりますので、奥で話を伺いま

しょうか？」

今までの話を何処で聞いていたのか、和やかに老夫婦に話し掛けた。

「やっと、話の分かる奴が出てきたか。……分かった、案内してくれ」

その途端医師は、フツと不気味な笑みを浮かべたが、すぐ真顔に戻ると老夫婦を連れて暫く歩くと、EVに乗りこんだ。EVの行き先スイッチを押さず、スイッチの下の何も表示されていないスイッチを二つ同時に長押しする。するとEVが動き出したと思うと、階数表示には存在しないB2より下まで降りて行く。

「おい、あんた。どこへ連れていくんや」

老紳士は、不安になってきたのか、少し強めの口調で尋ねた。

「おや？ どうしました？ 大丈夫ですよ。少しお話を伺うだけですから。ただあまり他言出来ない話なので、公な場所では、お話できないですよ」

医師は穏やかな口調で答えると、EV扉上部の階数表示ではなく、左腕につけた腕時計をじつと見詰め続けていた。

そのまま5分程経過しても、EVは止まる様子をみせなかった。

老紳士は不安感を隠せずに、医師を睨みつけた。

「おい！ いつまで降りるんや！ もう、だいぶ降りたぞ。おい、聞いてんのか！」

老紳士が医師の胸倉を掴もうとした時、『チン』と音が鳴ってEVの扉が開いた。

EVが止まった事に老夫婦は、少し落ち着いたのか、ゆっくりとEVから降りた。老紳士が振り返り、医師に何かを言おうとした、その途端EVの扉が『バタツ』と音をたてて閉まったのであった。『おい！ 何の冗談や！ どうなっとなねん！ 返事せえ！ 何やこれわ！ おい、こら！ どこ行きよった！』

老紳士は、EVの扉をドンドンと叩きながら、大声で怒鳴り続けた。

しばらくして、突然先程の医師の声が聞こえてきた。

「坂下さん。すみませんが、今後の余生は、そこでお過ごし下さい。浩二君は、医学的にもかなり貴重なサンプルですので、お返しする事は叶いません。また、この事を口外されては、今後の世界の為にもなりませんので……。それでは、失礼させていただきます。あつ、そうそう。食事は、そこにいるプラントモンスターや元家畜モンスターを殺して調理して下さい。それでは、楽しい余生を。さようなら」

放送は、呆気なく切れ、途端に辺りは静寂に包まれた。

「おい！ 返事しろ！ おい！ 何とか言え！」

何を言っても、もう何も返ってこなかった。

「ねえ、あなた。どうなるの？ これから、どうなるの？」

老婦人は、半分泣きながら老紳士に尋ねたが、老紳士ももうどうしたらいいのか分からず立ちすくむ他になかった。

そんな老夫婦の周りに不気味な影が一つ、また一つと姿を見せ初めていた……。

人里離れた家に

「あゝ、よく来たね。道中、大丈夫だったか？ この辺りは、少し人里と離れておるで、バケモノ共に襲われたりせんかと、心配しておったんじゃ。……でも、よお来おった」

「お父さん、心配し過ぎよ。ここまで車で来てるし、走っている車には、あの怪物達も危ない事を知っているかのように近付いてこないんだから」

少し山間を入った所にある、小さな集落のような土地の一軒の家で、老人は、先程深紅の軽自動車から降りてきた女に話し掛けていた。女の傍で、まだ小さい子供が何かをちぎって遊んでいる。

「しかしなあ、伴子^{ともこ}。いつ何時、どうなるか分かんじやないか。今やこんな世の中だし……」

「そうね。ありがとう。これからは、気を付けるわ。でも、あの怪物も、かなり数が減ってきているみたいよ」

「ほう。またどうして？」

老人は、不思議そうに娘に尋ねた。

「うちの周りだけかもしれないけど、近所の子供達が、あれって遊びの一環なのね。モンスター狩りだとか言って、ほとんど毎日飽きもせず、どんどん殺していつているもの」

老人は、娘が少し悲しげな表情をしながら話すのを見て、違和感を感じながらも、『ほう』『へえ』と相槌をうちながら、話を聞いていた。

「そうか。そりゃ、良かった。では、お前の家の辺りは、安全そうだな。良かった。良かった。で……、なければ聖史^{さとし}も安心して遊べないからの。のう、聖史」

老人は、伴子の傍らですっと何かを破いている男の子に笑顔で話し掛けた。

「ほら、聖史。挨拶しなさい。おじいちゃんだよ」

伴子が、座り込んで男の子に声を掛けると、男の子は持っていた物をちぎるのを止め、伴子の顔をじつと見ると、伴子の耳元でボソツと何かを言った後、伴子の反応を見てから老人の方に振り返った。「こんばんは。おじいちゃん。今日は、ごちそうさま」

そう言つて、うつすらと不思議な笑みを浮かべると、また手にしていた、何かを、なにやらブチブチと音をたててちぎられるモノを、またちぎり始めた。

「今日は、お腹いっぱい食べられる」

聖史がそうボソツつと何かをちぎりながら言ったのを、老人は聞き逃さなかった。

孫の変な対応に小首を傾げながらも、老人は、遠方より訪問した、娘・孫を家の中に通して行った。

狂人

ジャラジャラ、ビジャツ！ ビユツ！ ジャラララ。と何かを引きずり、叩き付けるような音が鳴り響く森林の中で、一人の男が不気味な笑い声をあげていた。

「うひゃひゃひゃひゃひゃ！ 死ね！ 死ね！ オラオラオラ！ 死ね！ どうした！ もう終わりか？ ほら、来いよ！ 来やがれ！ ザコいわ！ よえーよ！ うひゃっひゃっひゃ！ ひゃーはっはっはー！ オラオラ！ 死ね、死ねえ！」

男は、頭の中から足の先まで返り血を浴び真つ黒になりながら、狂気的な笑い方をし、自転車のチェーンらしき物を振り回していた。この男、名を中田^{なかつ} 激^{げき}といい、先月までは家族想いの真面目で優しい男であった。

しかし、中田の静寂を覆す事件が起こった。最愛の妻と、一人娘をモンスターと化した鳥の群れに殺されてしまったのだった。しかも、中田の目の前で……。妻子は生きた状態のまま、逃げ惑いながら十数羽の鳥に啄まれ絶叫しながら、この世からその命を消したのであった。なぜか、中田は鳥から狙われること無く、無傷のままその場に立ちすくむしかなかった。

その後より中田は豹変し、狂ったように笑いながら、自転車のチェーンのような鎖を振り回す狂人へと変化した。彼の目的は一つ、無念の死を遂げた愛する妻子の復讐であった。

この日もまた、鳥型モンスターを駆逐しながら、この森林へと足を踏み入れたのだった。

「おかしいな。この辺りに逃げ込んだはずだが。……っん？ そういえば、こないだの奴もこの辺りで見失ったな。……ということももしかしたら、俺はこの辺りのボスに近付いているんじゃないか？ この辺りのボス？ この辺りの？ ボスう！？ うおおおお！ ボスう！ うひゃひゃひゃひゃひゃひゃ！ 殺してやる！ 殺してや

るぞ！ 待つてろよ！ この辺りのボスうう！」

勝手な想像だが、確信に近い思考をした中田は、更に半狂乱になり、真っ黒な身体のまま、真っ黒なチェーンを振り回し、森林の奥へと歩みを進めて行った。

ある一軒家にて

「ふん。そうなんだあ。でも、どうしてかしら？」

「何が、どうしてかしらだよ。こんな気味の悪い部屋によく一日中居れたもんだな」

何かの研究室だろうか。部屋の四隅に、窓をも遮るように大きな檻のような飼育ケースが、積み重ねられており、その中に、いろいろな動物や植物が入っている。その檻に囲まれてる様にして、部屋の真ん中にはパソコンが2台不気味な光を放っていた。そのパソコンの光に照らされるように、一人の女性がパソコンと、その周りにある実験用の物なのか、大きな水槽を交互に照らし合わせながら、ぶつぶつと独り言を言っていた。

「あら、あなた、どうしたの？ この部屋に入って来るなんて珍しいわね」

「そう言うけど、お前、部屋の外まで、声が聞こえてきたら、気にならない方がどうかしてると思わないか？」

「あつ！ ごめんなさい。そんなに大きな声だったかしら。……でも、……見て。このデータ。すごい事が分かったのよ。まあ、前々から少しは気が付いていたのだけど、確証が得られなくて」

女性は、不気味な部屋の中に居るにも関わらず、キラキラした子供のような目で、入り口のドアの方を振り返ると、そこに立っている男性に手招きした。

「どうしたんだよ。そんなに嬉しそうに」

男は招かれるまま、部屋に入るとパソコンの中のデータに目を通した。

「どれどれ、んっ？ 何だこれ？ じゃあ、今のコレ何なんだ？ こいつら、おかしくなったヤツって、どうしてこうなったんだよ！？」

男はデータの理解が出来ないのか、女性に対して少し強めに質問

した。

「ね。不思議でしょ。でも、これが真実なのよ。これ、多分病気に
やないわ。多分、病院や何かの研究機関では、分かっていることな
んだと思うけど……。これね、この狂暴化したモノの肉を別の動物
に食べさせても、全く変化ないの。感染しないのよ。まず、狂牛病
や鳥インフルエンザの類いと別物って事ね。でね、私もそうだけど、
同じ部屋の中に居て、同じ空気の中で生きているにも関わらず、感
染しないのよ。これは、空気感染・飛沫感染更には、接触感染しな
いって事でしょ。さらに、同じ動物・同じ植物間で体液の交換、ま
あ輸血みたいな感じと思ってもらったらいいわ。それを行っても、
やっぱり感染しないの。但し、この場合、輸血された方はショック
死しちゃうのだけどね。まだあるわよ。これまで、なぜ人間やその
他の生き物が、死滅せずに来れたと思う？ ……何の質問だって顔
してるわね。あのね、コレ、昆虫には感染しないのよ。そもそも、
ここまでの話を聞いてると分かかると思うけど、感染という言葉を
使うのもどうかと思うでしょ。これは私の推測でしかないのだけど、
これは病気ではなく、いわゆる進化にあたいするものと考えるのが、
妥当じゃないかと考えるわ

け、さつきショック死した話したでしょ。これを、私は別の生物に
変化したと考えてるのよ。どう思う？ ……しかも、これは政府の
未発表事項なんだけど、確かな情報よ。あのね、この事象、日本で
しか起こっていないみたいなのよ」

その言葉を聞いて、男性は絶句した。

「今の、この、出来事が病気じゃない。しかも、メディアの未発表
事がある……。これ、本当……か……」

男性は、気の遠くなる思いで、パソコンの中の情報をもう一度見
直していた……。

狂人再び

全身血まみれの男。中田は、憶測のボスを追って、森林ではなく、既に森の奥地へと足を踏み入れていた。

「鳥のボスは、やつぱり鳥か！？ ホーホーか？ カーカーか？ うひゃひゃひゃ！ まさか、チュンチュンじゃないよな！ うひゃ！ うひゃひゃひゃあゝ！」

半狂乱で狂気に満ちた中田は、血まみれのチェーンを振り回しながら、森の奥へと入って行く。相変わらず、発狂したような笑いを続けていたが、目は笑っていないかった。

突然！ 辺りの空気が変わった。辺りの草木がガサガサと音をたて、獣の唸り声のようなものも聞こえる。

「来たか！ おおおっしやあゝ！ 来い！ 来い！ 来い！ 来い！ ……？ ん？ ……あれ？ なんだ？ どうなってるんだ！？」

中田は、かまえをとり、辺りを見渡したが、何かが襲ってくる気配は全く感じられなかった。

少し先の茂みの方から、何やら凄い覇気を感じ、中田はゆっくりと慎重にその場所を確認しようとした。途端！

「ぐわあ！」

何かにいきなり、頭を上から押さえ付けられた。

「クソッ！ 不意打……」

振り返り攻撃体勢に入ろうとしたが、無理矢理頭を押さえ付けられ立つ事が出来ない。

「静かに！ 見付かる！」

誰かがさらに頭を押さえ付けた。

「なんだ！？ おりゃあ！ なんじゃ、テメエ！」

立ち上がるうともがくも、頭を押さえる手は力を抜く気配がなかった。

「しっ！ 黙って！ ……ほら。始まる。ただ、採取に來ただけな

のに、とんでもないものに遭遇したわね」

声の主から、徐々に力が抜けていく。中田は、ゆつくりと横にすり抜けると、その声の主の横に座り、今始まったと言われた方を見た。そこには……。

獣の群れ、ペットで飼われるような物から、野生の物・鳥類に至るまでの物が2つのグループになっている。そこに自由を得た植物達、これも大木から雑草に至るまでの物が一つの布陣を組んでいた。ただこれは周囲の草木に紛れて、どれが普通の植物なのか、どれがモンスターなのか、見分けが付き難い状態であつたが……。3つのグループが、今、この場で、戦闘を始めようとしていた。

「なんだ？ 何が始まるんだ？ ……ん？ あれか！？ ボス！」

中田が立ち上がり駆け出そうとした瞬間、横にいたヤツが腕を引いて中田を座らせた。

「待つて。これは、縄張り争いよ。今、出て行ったら全てのグループの標的にされるわ。下手に動いても危ないから、しばらくここで様子を見ましょ」

沈着冷静に状況を判断し、無関係の中田に指示する相手に中田は、苛立ちを感じ相手の方を見た。

「……てか、テメエ誰だよ！ 何でこんな所に居る！？ つーか、女じゃねーか！ テメエ、邪魔すんじゃねえよ！ あいつはよ、あいつらはよ！ 妻と娘、渚と愛里の仇なんだよ！ 止めんじゃねえ！ うひゃひゃひゃ！ うひゃひゃひゃひゃ！ 殺す！ 殺すぞ！ 殺してやる！ 死に腐れろ！ テメエくらゐ！」

戦闘体制に入ろうとする中田を、女は無理矢理座らせると、再び中田の頭を押さえ込んだ。

「だからッ！ じつとしてなさい！ しっ！ あんたが死ぬわよ！」
「クソッ！ 手えどけるよ！ 何だつてんだ！ しかしよ。テメエ、誰なんだよ。何だつてこんな所にいる！」

中田の質問など聞く耳を持たないのか、女は目の前の縄張り争いから目を反らさずに、中田の頭からゆっくり手を離れた。

「始まったわ。なるほどね。これで私の仮説が正しいという事に一歩近付いたようね」

「だ〜か〜ら〜！ テメエは……」

「うるさい！ 静かに！」

「誰だつて聞いて……」

「やかましい！ 騒がしい男は嫌われるわよ。ちよつと、黙つてて！」

今にも掴み掛からん勢いの中田だったが、女に睨まれ、とりあえず動物Vsモンスターの方へ目を向けた。

「ふーん。あいつらつてあんな連携出来るんだ。一番不利なのは、野生の動物達ね。全く統制がとれてない。うわっ……プラントモンスターって、種類が増えると危険ね。あの上下からの攻撃は、乱戦の中じゃ多分かわせないわね。……やつぱり、アニマルモンスターが強いか……。あの攻撃力は侮れないわね。あつヤバ！ 動物達もうダメ。バラバラに攻撃してちやダメよ。あつ、あゝ。あゝあ、あれも野生のカンつてやつなのかしら。みんな逃げちゃった。……それにしても……すごいわね。雑草達、戦闘区域がこんな所だと全然ザコじゃないのね。周りの草と見分けがつかない。へゝ、根っこつて、移動手段だけつて訳じゃないのね。あれは連発できないみたいだけど、確実に不意打ちになるわね」

戦闘は人の行う戦闘範囲を軽く超えていた。動物達がアニマルモンスターへと飛び掛かるも、アニマルモンスター達は、その身体能力を活かし動物達より攻撃を受ける事なく、動物達を虐殺していく。その間にアニマルモンスターへと近付いたプラントモンスター達は、その無数とも思える枝を鞭のようにしならせ、上からの叩き付け、横からの払い出しと攻撃の雨を降らせ続けた。

「あれは、ヤベエぞ！ 地面から突然突き上げられる！ あれ、出てくる場所が分かんねーんだ。……うひゃひゃひゃ、あれは、俺の一番嫌いな攻撃だ。鳥ども〜！ 卑怯だぞ。空からの啄み攻撃！」

根を地中へ潜り込ませ、突然槍のように地面より突き出す不意打

ち攻撃。強靱な顎で大木の幹すらも粉碎するアニマルモンスター。
草木の届かない空中から、急降下し体当たりにて、その直撃地に小さな穴を開ける鳥型モンスター。

モンスター同士の戦いは、優劣を予想させることなく続き、中田と女は、じつと草むらの陰に身を潜め、その戦いの結末を待つしかなかった……。

怪しい子

家の裏手にある風呂窯にマキをくべていると、聖史が裏口から顔を覗かせた。

「おじいちゃん、今日の晩ご飯なあにい？」

聖史はそのまま老人の傍まで行くと、老人の右手を掴み、自分の頬へとあてがった。

突然の質問に、老人はどう答えたものと迷ったが、

「ん？ …… そうじゃなあ、聖史は、何が食べたい？」

聖史の頭にポンと手を乗せ、逆に聞き返した。

「えつとね、おじいちゃん」

「えつ……。何だつて？」

屈託のない笑顔で答える聖史の言葉を聞いて、何かの聞き間違いかと思い、老人は聞き直した。

「だからね。おじい……。ひやむ」

「何してるの聖史！ おじいちゃん困ってるでしょ！」

突然飛び出してきた手に口を塞がれ、びっくりしたような顔をしたら聖史だったが、伴子の顔を見て逃げるように去って行った。

「ごめんね。お父さん。また、訳の分からない事言っただしょ」

「いや。大丈夫だよ。聖史が、晩御飯を楽しみにしていたぞ。孫に期待されると頑張らないといけないな」

「もう！ お父さんたら。……。ふふつ。……。でも、ごめんね。こんな事になって……」

「ん？ 何じゃ？」

明るく振る舞っているが、どこか悲しそうに俯き加減で話す伴子を見て、老人は少々不思議に思えた。

「うっん。何でもない。何か手伝う事があつたら言つてね」

伴子は、申し訳なさそうに言い残して、聖史の後を追って行った。
『あやつ、何か隠しておるな。聖史も、おかしい。いや、伴子もお

かしいのかもしれん。これは、わし一人では危ないかもしれんな。
……大阪で、……確かアレの感染者が出たと、ニュースでやってお
ったな。一応、何かあった時の対策をしておくか』

老人は、マキをくべる手を止め、一人でぶつぶつと言いながら、
電話の方へ歩いて行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7461w/>

俺達のRPG物語（＋）

2011年11月10日19時10分発行